

学長告辞

卒業生・修了生のみなさん卒業・修了まことにおめでとうございます。私ども教職員は、長い研鑽を経て、ここ緑が丘を去られるみなさんを大いに誇りに思います。

みなさんが小樽商科大学の学生として過ごした期間、学内外で大きな出来事がありました。

二〇一一年に本学は創立百周年を迎えました。本学は、一九一一年(明治四四年)にこの緑が丘の地で小樽高等商業学校(第五番目の官立高商)としてスタートし、戦後一九四九年に小樽商科大学に昇格して現在に至り、百年にわたり、「実学の精神」に基づいた教育研究を続け、存在感を示してきました。国立大学にとって百年は、大きな節目であり、大いに誇るべきことであります。

百周年記念事業が終わった翌年二〇一二年五月に、今度は、大学構内において本学学生の飲酒死亡事故が発生しました。痛恨の出来事であり、私たちは大きな衝撃を受けました。死亡した学生が未成年者でもあったことから社会問題となって、本学の存立を揺るがしかねない事態に至りました。多くの人々のご尽力により、事故そのものは、一応の解決をみて、昨年五月に、体育館前の広場に「誓いの碑」が建てられました。私たちは、その前で、故人のご冥福を改めて祈るとともに、二度とこのような悲劇を起こさないことを誓いました。みなさんには、このことを、忘れないで、ずっと心の中にとどめておいて頂きたいと思います。小樽商大が、この苦難を乗り越え、次の百年に向かって進む姿を見守っててください。

さて、みなさんは、これから、仕事を持って働く新たな生活が待っているわけですが、ご存じのように、今の日本の社会は、変化が激しくかつ流動的です。人々が同一の価値・目標を持って進み、その先には豊かな生活が約束されていた「高度成長期」と呼ばれていた時代とはちがいます。低成長と人口減少・高齢化という「日本の将来を左右する重たい課題を背負った」社会であります。さらに地域や国が相互に依存しあった「グローバリズム」が支配する社会です。世界各地で発生する暴力・紛争、金融危機、地球環境の破壊などの問題がすべての国に波及し、各国は協調して解決の道を探らなければならない時代になりました。

みなさんが入学する直前の二〇一一年三月一日に発生した東日本大震災、そして東京電力福島原子力発電所の事故は、まさに未曾有の災害であり、全世界に大きな衝撃を与えました。被爆国である日本が、原発事故という形で再び放射能の恐怖

に襲われるとは、歴史の悲劇的な巡り合わせという他ありません。二〇一一年三月一日は、日本人の心に永久に刻まれることでしょう。

この事故は、わが国に復興という新たな課題を負わせるだけでなく、全世界の人々に、社会における生き方、社会の有りよう(何を大切に生きるべきか)に根本的な変革を迫るものでした。また、この事故によって、どのように科学技術が進歩しても、絶対安全ということはありません。われわれは、便利で快適な生活を享受する代わりに、一度起こってしまえば、取り返しのつかない、文明そのものを崩壊させるようなリスク社会のなかで生きていることを思い知らされたのです。

このような厄介な時代で生きていくためには、知識や理論を学習するだけでなく、獲得した知識を使って、未知のもの不確実なものに挑戦することが欠かせません。知識とは、その人の生き方を変えるようなものでなければならず、年をとるにつれ増していく知恵こそが本当の知識といえるのです。

そして、仕事をするなかで、また日常生活においても、ものごとや考え方を一つの方向に推し進めようとするグローバリズムの力に直面することがあると思います。その際、自分自身の拠り所、アイデンティティーを持つことはもちろん大切ですが、異なった文化・考え方に対する理解、他者とコミュニケーションする態度も必要です。

最も重要なことは、個々人がそのような態度や力を身につけていること、いいかえれば自律した意識と行動ではないでしょうか。みなさんは、小樽商科大学で、そのような能力と態度を身につけ、あるいは少なくともその大切さを認識できたと思います。卒業後も、修養と自省を怠らないようにしてください。みなさんの今後の人生が有意義なものになることを信じています。

平成二七年三月一七日

小樽商科大学長 和田 健夫